

# セミナーワーク

## 現代文 VOL.1

### ◆本書の使い方◆

本書は、センター試験対策の入門編、または、現代文の演習問題（基礎編）用テキストとして編集されています。レベルに応じて、高校一年生から高校三年生まで活用できます。詳解も充実しているので、自学演習用のテキストにもなります。また、一題二十分を目安に、模試形式で解かせることもできます。

### ◆目次◆

第1講座	宇野重規	「プロジェクト—未来をへ待つ—のために」……………	02
第2講座	隈研吾	「自然な建築」……………	07
第3講座	山極寿一	「暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る」……………	12
第4講座	前田英樹	「倫理という力」……………	16
第5講座	池田清彦	「やぶにらみ科学論」……………	20
第6講座	田中克彦氏	「田中克彦氏の文章に基づく」……………	25
第7講座	布施英利	「美術の基盤としての人体」……………	29
第8講座	武満徹	「Mirror」……………	34
第9講座	木村敏	「自分ということ」……………	39
第10講座	下條信輔	「下條信輔の新聞論説による」……………	44

# 第1講座 解答・解説

## 〈解答〉

問一 二

問二 解答例 どれだけ時間をかければ答えが出るのかわからないのが研究であるのに、一定の期間内で予定された成果を求められると、予定外の問題が出現した際に得られる研究上の前進ができなくなる。 (九十文字)

問三 ハ 問四 A ロ B ハ 問五 ロ

問六 解答例 目に見えないものや意のままにならないものを拒絶することなく希望を持って未来を待ち、まだ見えない未来への関与によって生きる力を得ること。 (六十七文字)

問七 イ × ロ × ハ ○ ニ × ホ ○

問八 a 純粹 b 余念 c 突拍子

## 〈解説〉

問一 言葉の知識を問う問題。

問二 傍線部の後で、予定外の問題や、新たな問題が生じた場合について述べられている。さらに次の段落で、これらのことを「研究上の前進」と評価するが、それは「プロジェクトの成果」ではないことを述べている。また、次の段落の「そもそも」の文で、本来の研究のあり方について述べている。これらをまとめしていく。

問三 傍線部の後に「未来はあらかじめ予想され、予期されるものとして扱われている」とあるので、これを逆にし、「我々の予想や予期からまったく外れたもの」を選択肢から選ぶべき。

問四 Aは、「未来」を考へるのは「現在」という時点である。「過去」では不自然。Bは、「前のめりの姿勢」になっているのだから、「未来」へ向けているはず。

問五 空欄前の「はっきりとした証拠をもって示せるものではない」とあり、空欄には「はっきりとした証拠」に近い言葉が入るはず。

問六 オバマは「希望」を〈待つ〉必要があると述べていると傍線部の前の段落にある。そのようなオバマが大統領になった事実が「現代社会において潜在

的に望まれているものの本質を暗示している」とあるので、「希望」「待つ」は解答に必要なキーワード。さらに、筆者の主張をみると、傍線部の次の段落に「求められているのはくわからなさをむしろ自分の生きる力へと転化するための知恵」とあり、最後から二番目の段落にも「求められているのはむしろ、目に見えないもの、自分の意のままにはならないものを拒絶することなく、未来を〈待つ〉ことであり」とある。これらの内容をまとめる。

問七 イは、第九段落に「近代化の結果、不確実性は計算されて予測されるべきものとみなされるようになった」とあるので、誤り。ロは「不確実性は高まってしまいが誤り。「不確実性は計算されて予測されるべきもの」になったと筆者は述べている。ハは第八段落などの内容に合致する。ニは、「最近増えつつある大規模な自然災害」という内容は本文にはない。第十段落をふまえているようだが、「経済的な損害」については触れられていない。ホは最終段落の内容に合致する。

〈本文解説〉

「プロジェクト」を企画し成果を求められる現代社会の現状を批判し、未来を〈待つ〉ことを提案した文章。

筆者は今日人口に膨らんでいる「プロジェクト」という言葉は、一定の成果を、予定された時間内に実現するための計画を意味すると説明する。その上で、大学のような研究機関においてまで「プロジェクト」が日常化している現象を挙げる。筆者は齋田清一の言葉を引きながら、現代社会が「前のめりの姿勢」になっており、〈待つ〉ことができない社会だと述べる。さらに、不確実性についても、近代化の結果、不確実性は計算されて予測されるべきものになったとし、「プロジェクト」型の社会について、未来を計測可能なものとして予測せんとし、結果として逆に未来が見えなくなっている社会だと位置づけている。

現代社会において見失われているのは「希望」であり、人々は希望を持つこと、不確実な未来に関与することで生きる力を得ることができると主張し、我々に求められるのは、予測できるものとできないものを区別する知性であり、わからないものを認める勇氣であり、それらを生きる力に転化する知恵だと主張している。

〈読解のポイント〉

★「プロジェクト」という言葉が「一定の成果を、予定された時間内に実現するための計画」という意味を持ち、それが「前のめりの姿勢」を生み出しているという内容を理解できたか。

★大学において「プロジェクト」という言葉が日常化することによって筆者が批判的であることと、その理由を理解できたか。

★「プロジェクト」型の社会が〈待つ〉ことのできない社会であるという点を理解できたか。

★「プロジェクト」型の社会のマイナス面が、未来を計測可能なものとして予測せんとし、結果として逆に未来が見えなくなっている、という点であることをつかめたか。

★現代に求められていることは、未来のわからないものを自分の生きる力へと転化するための知恵であるという主張が読み取れたか。

第一〜二段落

プロジェクト 今日、人口に膨らんでいる  
プロジェクトの意味…一定の成果を、予定された時間内に実現するための計画

第三〜五段落

大学のような研究機関でも「プロジェクト」が日常化している  
問題がわからない…研究上の前進ではあっても「プロジェクトの成果」とは見えな  
本来の研究…どれだけ時間をかければ答えが出るのかわからな  
しかし  
現在の大学の研究…プロジェクトとして把握され、管理されるよ  
うになった

第十一〜十三段落

「プロジェクト」型の社会において見失われているのは「希望」  
オバマ（大統領）  
証拠を示せなくても、〈待つ〉必要があるものが「希望」だとい  
「希望」…現代社会において潜在的に望まれている  
未来への「前のめりの姿勢」に人々は疲労感を感じている

第六〜十段落

齋田清一 現代の労働における「プロ〜」…「前のめりの姿勢」だ  
とい  
「前のめりの姿勢」に対する危惧  
未来とはけつて何が起きるかわからない部分を持つ  
「絶対的な外部」の排除  
「待つことができない」社会  
成熟することが難しい  
近代化の結果、不確実性は計算されて予測されるべきものとみな  
される  
↓  
「リスク」が計算される「リスク社会」  
予測しがたい「リスク」が現代社会を襲っているとい  
逆説

第十四〜十七段落

求められているもの  
現在の時点で何が予測でき、何が予測できないかを区別する知性で  
あり、わからないものはわからないと言っ  
さらにわからないものを自分の生きる力へと転化するための知恵  
「プロジェクト」型の社会において、私たちはすべてを予測しよう  
として、結果として未来を見失い、希望を見失っている  
むしろ自分の意のままにはならないものを拒絶することなく、未来  
を〈待つ〉ことであり、その〈待つ〉ことが許される・可能にする  
ための社会的条件を整備すべき